国立国語研究所学術情報リポジトリ

開会の辞：国立国語研究所6年間の歩み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 影山, 太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000948

開会の辞～国立国語研究所 六年間の歩み～

所長　影山 太郎

本日は第九回ＮＩＮＪＡＬフォーラムにかくも賑々しくご来場いただき、誠にありがとうございます。

今回は、前回までと異なる特別な趣向を凝らしています。従来、フォーラムというのは、一般の方々に向けた講演会として日本語に関する具体的なテーマを取り上げてきましたが、今年三月で国立大学と同様、国立国語研究所も六カ年の中期計画期間が終わり、ひとつの大きな節目を迎えます。そのため、過去六年間の研究活動の総括として、一般の方々だけでなく研究者の方々にも聞いていただきたいという想いから、従来のフォーラムと比べると少し専門的な話を交え、講演会というよりむしろ研究発表会として企画してみました。このような企画は、二〇〇九年に文化庁所轄の独立行政法人から文部科学省所轄の大学共同利用機関に模様替えした本研究所にとりましては、とりわけ意義のあるものと考えている次第です。

国語の研究所から日本語の研究所へ

本日の表題は「ここまで進んだ！　ここまでわかった！　国立国語研究所の日本語研究」となっています。私の開会の挨拶では、「ここまで進んだ！」の部分、つまり、この六年間で本研究所がどう変わったか、どのように進展してきたかという大きな流れをお話しします。その後、五つの講演と展示・デモンストレーションで「ここまでわかった！」という具体的な内容に入っていきます。

六年間で変わったもっとも基本的なことは、国語の研究から日本語の研究へと範囲が広がったという一言につきます。言語というのは、日常のコミュニケーションの手段であると同時に、人類だけに備わった論理的思考や創造性の源泉でもあるわけです。言語が持つこの二つの側面のうち、「国語」という用語はコミュニケーションの手段としての側面を表すものと理解できます。言い換えると、普段日本語を使っている私たち国民の立場、いわば「ウチ」から見た用語です。これに対して、「日本語」という呼び名は、地球上に六千以上あると言われる人間言語の一つとして

捉える用語で、この側面を理解するためには「ソト」、すなわち諸外国語から見る視点が必要になります（図1）。

ウチ（国民の眼）から見た日本語というのは、たとえば、漢字が多すぎる、マスコミでカタカナ言葉が多くて理解できない、子供のころから使っていて、てっきり標準語だと思っていた言葉を会社で使ったら、東京の人に通じなかった、といった日常の身近な問題に直結します。

他方、ソト（諸外国語の観点）から見ると、たとえば、日本語は世界で一番難しいことばだといわれることがあるが、本当だろうか、日本語の文法や音声は世界の諸言語とどのように異なり、どのように似ているのだろうか、といったことが問題になります。こういった疑問に答えるためには、日本語の独自性と同時に、他言語との共通性を探っていかなければなりません。言語学の研究では、このような観点は当たり前で、昔からやっていたことですが、国立国語研究所としては新しい取り組みなのです。

「日本列島の言語」の研究へ

国語研究所というと、国語すなわち日本語の研究所だと思いがちです。しかし、日本列島には日本語のほかにも、古くから使われている言語があります。それは、沖縄県の島々で使われている琉球諸語と、現在では北海道のごく一部にだけ残っているアイヌ語です。琉球諸語は日本語の方言と見なされることもありますが、最近の言語学研究によると、日本語と琉球諸語は一つの親（日琉祖語、英語ではProto-Japonic）から分岐した姉妹語だということがほぼ確定されてきました。これに対して、アイヌ語は日本語および琉球諸語とは異なる系統であるという考え方が一般的です（図

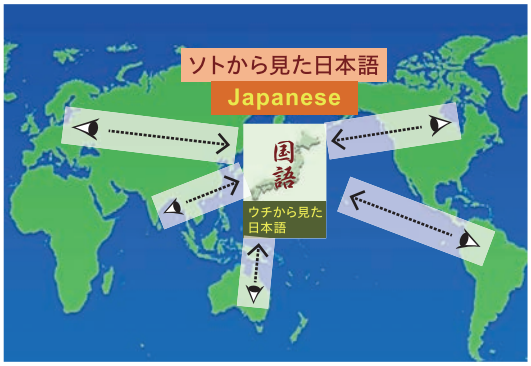

図1

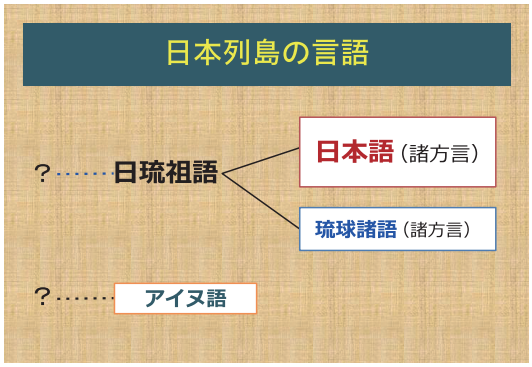

図2

2)。しかしそれでも、アイヌ語が縄文時代には日本列島の広い地域で話されていた有力な言語の一つであったことは間違いのないところです。アイヌ語と琉球諸語は、消滅危機言語に関するユネスコの報告でも危機の度合いが高い言語として取り上げられていて、**いま**研究を進めなければ、あとで取り返しのつかない事態になってしまいます。また、琉球諸語、アイヌ語の研究を深めることによって、これまでは系統的に孤立した言語とされてきた日本語そのもののルーツを解明する手がかりが得られるかもしれません。沖縄語を中心とする琉球諸語の研究は、旧国語研でも多少はありましたが、地球上のいたるところで起こっている言語多様性の危機というグローバルな観点から捉える姿勢は新しいものです。さらにそのなかに、アイヌ語を含めていることは、国立国語研究所の歴史において画期的なことと言えます。

日本語の将来にむけて

アメリカ言語学会の機関誌で言語学では世界最高峰の専門誌である*Language*に、Michel Krauss の“The World's Languages in Crisis”(1992) という論文があります。そこでは、地球上で約七千ある言語のうち、どれくらいの言語が滅亡しかけているか、どれくらいが将来永続的に繁栄していくかといったことが論じられていて、それによると、世界の言語は大まかに三つのグループに分かれます。

①二〇～五〇％は絶滅寸前の状態（言語を受け継ぐ子どもがいない）。

②四〇～七五％は消滅の危機に瀕した言語で、このままいくと①になってしまう。アイヌ語は①、琉球諸語は①ないし②に該当します。

③残りわずか五％が将来も安泰な言語です。

ここから単純に計算すると、二一世紀の終わりには、地球上にはたった三五〇程度の言語しか残らないという予想になります。言語の多様性は文化の多様性、ひいては人間そのものの多様性を意味しますから、この推測は極めて深刻な問題をはらんでいます。一五〇〇年より以前は地球上に一万を超える言語があったといわれますが、文明の発達とともに少数民族の言語がどんどん淘汰されていくのです。

では、みなさん、日本語そのものはどうなると思われるでしょうか。

多くの人たちは、「自分が普段使っている日本語が①や②の状態になるなんて、考えられない。日本語は将来も安泰だ」と思っているのではないでしょうか。ほんとうにそうでしょうか。

単に、日本の人口が将来、大幅に減るということだけが理由ではありません。小説家であり評論家の水村美苗さんは、あまり小さいときから英語を教えると、子供の日本語力に影響があるのではないかという懸念から、日本語の将来について警鐘を鳴らしています（『日本語が滅びるとき』二〇〇八年）。また、エスキモー語を専門とする言語学者の宮岡伯人さんは、まさしく消滅危機に直面しているエスキモー語と同じように、日本語も将来そのようになる可能性があることを危惧しています（『「語」とはなにか・再考』二〇一五年）。

言語の消滅危機の原因は、単に人口が減ることだけではありません。言語は、人工的につくったものではなく、人間生活のなかで自然に生まれ、発達してきたものですから、時間とともに変化していくことは当然ですし、地域や年齢、性別などによって違いがあるのも当然です。このような言語の内的変化は、話者自身も意識することがあります。しかし、言語は内的原因で変化するだけでなく、外的な原因、特に諸外国語との接触によっても変化します。このことは、案外気がつかないものです。

現代の日本語の中にカタカナ言葉（借用語）が多いことは自明ですが、カタカナという目に見える形でないところでも、英語的な発想が入ってくるという可能性があります。たとえば、代名詞は英語学習の初歩において、he＝「彼」、she＝「彼女」と、イコールの関係として教えられることが多く、この教授法では日本語の「彼、彼女」が持つ独特のニュアンスが切り捨てられてしまいます。その結果、たとえば日本人の大学生が自分の先生のことを「彼は……」といったり、日本人の子どもが自分の母や姉のことを「彼女は……」といったりする、といった日本語として不自然な用法がだんだんと広がってきます。

もし将来、このような外国語からの影響が日本語の語彙や文法全体にまで及ぶとすると、そのときの日本語は、はたして「日本語」と呼べるのだろうか、と考え込んでしまいます。そのような事態が起こるかどうかは別にして、国立国語研究所の使命は。現在および過去の日本語の豊かな姿を将来に引き継ぐことであると考えています。

まとめ

新しい国立国語研究所は、ウチとソトの複合的観点を取り入れることで、この六年間で次のような進化をとげました。

一．ウチの観点を精緻化することにより、標準語や方言の姿が詳細にわかるようになりました。（具体例は講演1、2を参照）

二．ソトの観点をとることで、日本語に特有とされるさまざまな言語現象でも、世界諸言語と同じ土俵で研究することにより、その本質が理解されるようになりました。（講演4、5）

三．非母語話者（外国人）の日本語学習を、ウチの視点とソトの視点が接触し、衝突する場であると捉えることで、日本語教育についても新たな研究の方向が見えてきました。（講演5）

四．いろいろな研究成果を国内だけでなく、積極的に海外にも発信することで、日本語研究および日本語そのものの国際的普及を促進する足がかりができました。なかでも、過去から現在までの国内外の日本語研究を展望し、日本語から世界の言語研究に貢献しようとする日本語研究英文ハンドブックシリーズ（図3）の国際出版が開始されたことは、とかく国内に閉じこもりがちな日本語（国語）の研究にとって大きなブレイクスルーになるはずです。

以上をもって、私の開会の挨拶とさせていただきます。引き続き、講演をお楽しみください。

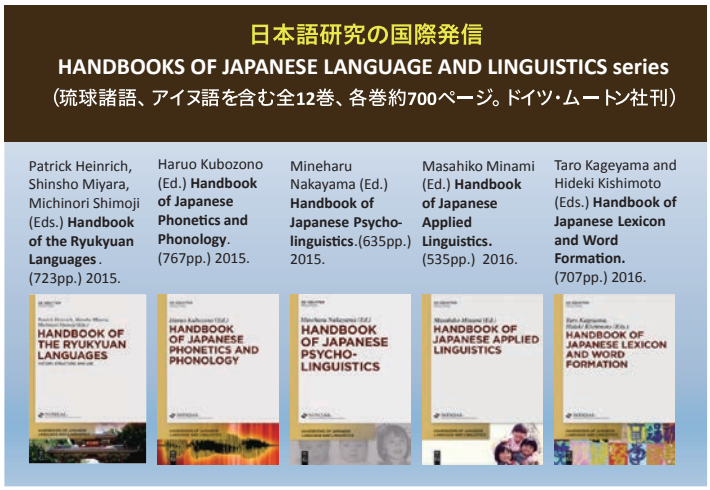

図3